

事務局説明資料①に対する 委員の事前御意見

経済産業省

平成29年2月15日

1. 開催意義

【井戸委員】

「■関西・大阪で開催する意義」として、以下の2点を追加すべきである。

- 「ワールドマスターズゲームズ2021関西」で創出したレガシーを万博につないで生かす。
- 過度の東京一極集中を是正するための国土の双眼構造の実現に寄与する。

【加藤委員】

誘致活動が行政、大企業を中心とするイメージではなく、大阪市民、府民の総意に基づくものにする。その為に、関西人の気質を喚起する「おもしろい」「得する」といったイメージ訴求を行う必要がある。日本は格差社会といわれているが、関西経済でも地域の格差、街の格差やストリートの格差がある。開催側だけでなく、参加者が一体となりプロジェクトを盛り上げるきっかけ作りを行い、ローカルエリアの活性化に取り組む。

【澤田委員】

国際社会とのかかわりに日本の積極姿勢を示し、日本の位置づけについて未来志向の価値・意義を示してはどうか。

【澤田委員】

日本の特性をもっと正確に定義し記述したい。
・「多様な地域で開催する国際博覧会とするため15年ぶりに東アジアで開催」と提案してみてもどうか。国際博覧会は人類社会共通の資産なので、様々な地域で開催されるべきで、ヨーロッパ⇒中東⇒ヨーロッパではなく、中東の次はヨーロッパ以外の地域での開催が望ましく、東アジア・日本が2025年の開催を引き受ける。
・「世界一安全で、安心な開催環境を提供できる」

【澤田委員】

関西の特性をもっと正確に定義し記述したい。
・「日本の伝統文化の中心」を強調したほうが良いと思われる。
・日本第2の都市圏であり、都市機能や経済基盤、文化・観光資産が整っていることを示してはどうか。

【澤田委員】

2025年を定義すべき。例えば、節目という意味では「阪神淡路大震災から30年」「日本万国博覧会から45年」「第2次世界大戦終戦から80年」。

【瀬名委員】

目指すテーマの方向性は「未来への想像力」と感じた。未来を想像して豊かな生き方を願うのは、生命進化によって生まれた、私たち人間の誰もが持つ知のパワー。自分だけでなく他者の幸せや健康も想像できる私たち人間だからこそ、想像は未来をつくるパワーとなる。この博覧会で世界中の人の想像力が集まり、会場で未来が立ち上がるといい。そのパワーをまとめる場所は日本、そして大阪がふさわしいと感じる。

【土屋委員】

人々は、病気を治すだけにとどまらず、予防等の意識が高まり「トータルヘルスケア・ソリューション」を求めている。関西には、くすりの町である道修町（どしょうまち）に代表される医薬品関連産業が集積していること、iPS細胞・再生医療分野等の大学・研究機関が存在する等、日本の研究基盤が確立している。2025年には、関西発の新たな技術革新によって、世界最高水準の医療技術の実用化が期待されている。

1. 開催意義

【橋爪委員】

「日本における意義」として、次世代を担うクリエイターに活躍の場を用意し、日本独自の新たなデザインの潮流や、日本初の文化的なムーブメントを世界に発信する機会とするという視点も重要。クールジャパンの新たなフェーズを牽引し、その到達点を世界に例示する事業と位置づけることが必要。

【橋爪委員】

「日本における意義」では、国際観光振興の視点は欠かせない。とりわけ会場予定地が瀬戸内海の東端に位置することを意識すべき。視点場を用意すれば、会場から、大阪湾の眺望を楽しむことが可能になる。かつて世界有数の美観と名所群が点在する多島海として「世界の宝石箱」と讃えられた瀬戸内海を、再度、国際観光地として世界に訴求し、観光振興をすすめる契機としたい。

【橋爪委員】

「2025年に開催する意義」では、1970年大阪万博から50年の節目を迎えつつあるタイミングで、当時、世界に示した理想を発展させて、その意義を深めつつ再掲するという視点も必要。70年大阪万博では「よりゆたかな生命の充実を」というサブテーマのもとに、世界各国が独自にすすめていた研究、臓器移植・免疫・細胞などに関する「未来医学」の可能性が提示されていた。今回の博覧会に繋がるものであり、立脚点と位置づけ直すことが可能である。

【橋爪委員】

テーマに託した「理想」を高らかに掲げ、日本国が世界に貢献する姿勢を有していることを朗々とうたいあげることで、日本開催の必然性を強く主張すべき。世界各国に感動を与えるメッセージを用意したい。

2. 基本理念（骨子案）

【澤田委員】

日本を中心とした先進国の事情だけでなく、発展途上国も含めた人類と人類社会からの視点が求められる。人類史から現代と近未来社会への理解を基礎として、日本が日本らしいやり方で国際社会をリードする意志と熱意が表現されると良い。

【澤田委員】

国際機関との連携を意識すべきで、特に国連の持続可能な開発計画（SDGs）などへの連帯を意識したほうが良い。

【橋爪委員】

イベントは、会場での経験や感動を通じて、人々が従来の常識を捨てさり、みずからを刷新する場であるべき。「気づき」「意識改革」を通じて、新たなムーブメントを起こしてゆくことが重要。原案にある「好奇心」という言葉を、うまく展開するのが良い。

【橋爪委員】

予定調和的な未来像を提示するのではなく、「好奇心」をもってフロンティアを拓くことで、よりよい未来を見いだすという姿勢が必要。

3. テーマ・サブテーマ

【井戸委員】

今回示されたテーマ案「未来社会をどう生きるか」は、概念としては広すぎて、どのような博覧会なのかイメージしづらいのではないかと。大阪府案の「人類の健康・長寿への挑戦」を何らかの形で生かすべきである。

【喜多委員】

東京五輪が開催される2020年に向け、5G、4Kといったコミュニケーション技術の発展は加速している。その5年後となる2025年は、世界中がもっと濃密につながる時代だ。仮想現実（VR）、拡張現実（AR）の技術も活用して、国際博を世界に発信すると同時に、実際に数千万人に参加してもらうには、我々が大阪万博で未来を垣間見たように、8年後の日本でしか描けない「未来」を体感できるようにしなければならない。

【澤田委員】

広く理解でき良い反面、人類社会の課題と解決の視点が明示されると良い。

【澤田委員】

サブテーマについて、テーマを展開・分類する軸を設定し、3～5に整理したい。

【橋爪委員】

「Designing Our Lives for Future Society」という原案は、方向性としては良い。ここで示される「社会」の規模が見えないが、狩猟・農耕・工業・情報に続く5番目の変革を経て実現する「Society 5.0」、ないしは第4次産業革命を経て出現するであろう「超スマート社会」などを示すものと理解すれば説明がしやすい。

【橋爪委員】

日本語の「未来社会をどう生きるのか」は、「多様な生命／生活をデザインする」という意味合いの英語表記の両義性、「Lives」と複数形にしたなどの工夫が反映されていない。特定の生き方を伝授、いわばハウツーを示す場であるような印象を持つ。たとえば「未来社会をどう生きるのか デザイニング・アワ・ライブス」「幸福な未来社会をめざして デザイニング・アワ・ライブス」「未来社会の共創 デザイニング・アワ・ライブス」などとカタカナ表記と副題とを併記するのも一案であると考えます。

【福井委員】

2025年大阪に万博を誘致すると強い決意で臨んでいるがフランスも周到な準備を進めており、勝つのは容易ではないという認識が必要である。従ってテーマは日本の優位性を謳うより、共に考える、共に参加したいと多くの国が感じるテーマを掲げたい。「未来社会をどう生きるか」Designing Our Lives for Future Societyは受け入れやすい。

【松下委員】

万博サブテーマのひとつに「美」というコンセプトを加える。人類の普遍的な価値概念である真・善・美。そのひとつ「（日本の）美」を万博で世界へ発信する。例えば、日本（関西）は、「芸術」の追求目標である「美」を表現できる伝統工芸作品を多く有しており、万博にて、それら貴重な工芸作品を展示するとともに、創り上げた方々（人間国宝など）からもご協力を得ることにより、日本が有する「美」、「本物の技」、「日本の美」というイメージを世界へ発信する機会とする。また、実際に、或いはバーチャルにて、工芸品づくりを体験するコーナーを設け、人間国宝の作品がいかによろしいかを実感いただくのも良いのでは。

4. 事業展開

【井戸委員】

関西圏域に集積されているライフサイエンス分野の企業・研究所などをサテライト会場として位置づけ、広域性を有する博覧会とする旨を追記するべきである。

【大崎委員】

大阪万博が、大阪・関西から日本全国を巻き込んだ催し物になるように、イベントやSNSを多用した“つながるプロモーション”をやれば良いと思う。そして、その動画を世界中に発信していくことによって、つながりは世界規模に増幅されるでしょう。笑顔でつながる大阪万国博覧会へと導きます。

【加藤委員】

3000万人を迎える為、インフラ（交通・宿泊・案内・流通・多言語対応、等）整備を行う。整備された施設や環境が、博覧会終了後にどの様に有効活用され地域に還元されるのか、具体的に打ち出すことも大切である。また、その施設の維持管理に多額のコストがかかるケースが想定されるが、収益が上がるビジネスモデルや、ランニングコストの軽減プランが必要。そして、その時代の若い人々につきささるソフトウェアを提案する。

【蔭山委員】

エネルギーコントロール、防災機能、通信インフラ、低コストで効率的な公衆衛生など、高度なインフラを整えたスマートシティを目指すべき。特にエネルギーに関しては再生可能エネルギーを中心に蓄電池などを活用し、地産地消型のエネルギーシステムを島内で構築してはどうか。将来的にスマートシティのモデルケースとしてまちづくりの海外輸出も展望したビジネス展開も期待できる。

【蔭山委員】

夢洲のまちづくりのコンセプトはスマートシティ。夢洲での万博が未来都市の可能性を示すものになることを期待。世界中から高度な技術を持つ企業が集まり、最先端技術の集積地にすることで、夢洲を未来の展示場にする。その様なまちづくりであればスポンサーも集まるのではないかな。

【蔭山委員】

夢洲は人が住んでいない広大な更地である。特区等の認定を受けることでドローンや自動運転等の実証実験地として活用出来るのでは。更には夢洲に訪れた人々の行動などをデータ集積し、様々な商品開発に生かすことも出来る。夢洲を新技術やビッグデータに関する実証実験の場として活用する。

【蔭山委員】

愛知万博では長久手、瀬戸のメイン会場以外で名古屋市内の笹島でも連動開催を行った実績がある。大阪での万博も広域開催を検討してはどうか。メイン会場を大阪、サブメイン会場を京都、神戸として、それぞれの場所でしか体験できないことを中心にしたイベント等を行う。関西域内での移動も活発になり、より日本の魅力を発信できるのでは。

4. 事業展開

【喜多委員】

未来は今の技術の延長線上にはない。人類はたえずディスラプション（創造的破壊）を起こしているからだ。AIやロボットが単純な労働を肩代わりしてくれれば、人間はもっとクリエイティブになれる。自動運転は従来のモータリゼーションが作り出した社会と産業を一変させる。テクノロジーの千変万化によって、あらかじめ設定したコンセプトがたちまち陳腐化してしまうリスクもある。臨機応変に事業展開を変えられる柔軟性が必要だ。

【澤田委員】

知の結集⇒知の創造と結集（課題解決の創造を呼びかけるべき）

【澤田委員】

事業展開の方向性について、網羅的に示されているが、体系的に整理するべき。

【澤田委員】

日本が実現をめざす、国際社会にとって価値のある新しい国際博覧会の骨子を基本理念・テーマと併せて具体的に示す骨太の展開を示すべきと思われる。

【瀬名委員】

「常識を越えた万博」「皆で世界を動かす万博」という方向性は賛成。事業展開のアイデアには「各種のイベント案」「全体的な会場構想」「地域国際連携」の3つがあると思う。斬新な万博実現のために、まずは基本理念やテーマを最大限に表現できる会場構想を集中的に検討できるとよいのではないかと思った。それは若手だけに限らず広い年齢層で議論してよいと思う。

【瀬名委員】

2025年には文系・理系問わず種々の分野がどんどんクロスし、「生命（生きる）とは何か？」「よりよい社会とは何か？」という根源的な問いに向けて、思いもよらないアプローチが次々に出てくるはず。「ひとりひとりの想像力はつながる。つながるとパワーになる」。どんなテーマであっても、その未来像を共有できる勇気を表現した万博であってほしい。

【瀬名委員】

「待たずに入れる」「並ばない、疲れない」よりは「待ち時間もあったが今日は来て良かった」「人気の展示は全部回れなかったが、家族のペースで楽しめてリフレッシュになった。また来たい」と最終的な満足度で会場全体をデザインできるとよい。「いま自分が5分待つとお年寄りが10分早く入れるので嬉しい」「その5分も楽しかった」と来場者ひとりひとりが自然に思いやりの気持ちを持てる万博になったら素晴らしい。

【瀬名委員】

映画『スター・ウォーズ』の「フォース」は、体内のミディ・クロリアンが活性化することで生じるという設定。細胞内のエネルギー生産工場ミトコンドリアと健康長寿の関係に似ている。ミディ・クロリアン値は機械で測定できる。例えば「今日万博に参加したらこれだけ健康増進になった」と獲得ポイントが見えると楽しい。「そのポイントは世界各国の健康増進のために転用できる」など。

【瀬名委員】

「機械だからできるサービス／機械と人間が協調するサービス／人間だからできるサービス」をきめ細やかにデザインした、人とロボット・AIの新しい共存サービスを日本から提案・発信。人とロボットは時間と場所を分けないこと。レストラン、受付から託児所まで、すべて人と機械の共存サービスで未来を感じさせてほしい。

4. 事業展開

【瀬名委員】

世界一気持ちの良いジョギングコースが会場内にある（万博後も市民に愛されるような）など。会場往復の交通機関も、乗れば世界一健康的だといえるようなものと嬉しい。「なるほど、日本はこんなふうに豊かに科学技術を応用するのか」と世界各国に感動していただけるような開催地になってほしい。

【瀬名委員】

【遊びと創造】折り紙、けん玉など日本の遊びはいまや国際的な人気。複雑で圧倒的な作品や斬新なパフォーマンスも増えており、一般の人も楽しめて知能や身体の鍛錬にもなる。想像力豊かに伝統と最先端技術が交差する展示を見たい。折り紙を折る指先の触感が未来への通信手段になる、けん玉の動きが会場の環境づくりに転換されるなど、万博ならではの時空間を超えるしかけがあると楽しそう。

【瀬名委員】

【想像力とデザインをつなぐ博覧会】「人類は未来をどのように想像してきたか？」「人々は未来社会をどのようにデザインしてきたか？」という切り口の展示はよくある。人工知能研究や脳科学などでいま盛んに議論されているのは「想像力がかたちになる瞬間、何が起きているのか？」だと思われるので、その部分の躍動が鮮やかに感じられる万博になれば、人間の豊かさを再発見することになり、素敵だと思う。

【瀬名委員】

【未来とひとりひとりの関係の視覚化】現在は脳のネットワーク構造や全身の細胞・遺伝子ネットワークが解析され、スモールワールド／ミドルワールド／ビッグワールドと、世界の多層的なつながりの構造に、生きていることの本質を見ようとする時代。自分が万博に参加することは、明日の世界のつながりをつくることだと実感できるVR/ARデザインが全体にあるといい。

【瀬名委員】

【考え方の新しいデザインの提案】現在のネット社会は「ぱっとわかりやすい」ことが重視されがちだが、本当に大切なテーマは一言で表現できないことも多い。何年も考えることでようやく見えてくるものもある。「わかりにくい大切なこと」をいま以上に皆で共有し、議論できるような、新しい社会ネットワーク構造や人工知能のサポートシステムが、この万博を通して生まれるといい。

【瀬名委員】

【思いやりの心をサポートする技術】私たち人間には進化の過程で生じた「脳のクセ」があり、どうしてもそれがいじめなど難しい社会問題を生んでしまうのではないか。私たち人間が今後「より人間らしい知能」を発揮できるよう、脳のクセを見抜いてサポートして人工知能やロボットのシステムが、この万博で花開くといい。

【瀬名委員】

【恐怖の未来像と向き合う場もつくる】パンデミックや人工知能侵略などによる人類絶滅といった極端な社会不安は、人が恐怖の未来像を想像してしまうから。人間には負の想像力があることも認めた上で、寺田寅彦が述べた「適切に恐がる」のような、よりしなやかな未来への想像力が育める万博になるといい。

【土屋委員】

超高齢社会では、とりわけ「健康寿命の延伸」が重要である。健康増進には、スポーツを活用すべき。人々は、スポーツを「みるヒト」、「するヒト」、「支えるヒト」から成っている。「みるヒト」と「するヒト」には大きなギャップがあり、「するヒト」を増加させる仕組みを検討する必要がある。これにより、生涯にわたってスポーツを「するヒト」が増加し、そこから関西のトップアスリートが生まれると共に、健康寿命が延伸する。

4. 事業展開

【橋爪委員】

インターネットに限らず、2025年における最新の通信技術を媒介として、参加型の博覧会とすることは重要。上海万博の際、バーチャルサイト「Expo Shanghai Online」において、会場内各館の展示品を海外からもweb上で体験することができたが、双方向性の体験ではなかった。

【橋爪委員】

国境を越えて世界の人々を繋ぎ、人々を元気にしている日本発の技術やソフト、創造産業や文化産業を強くアピールすることも必要。たとえば、カラオケ、温浴、アニメ、漫画、ファッション、音楽やダンス、アートなども、「幸福な生き方」を追求するうえで不可欠な要素。今後の技術革新にもとづきつつ、より魅力ある事業展開が想定されるべき。たとえば、人気アニメの世界観を最新技術で再現するミュージアム、会場内と世界とを結び、各国のアーティストが共同でテーマ曲を創り上げ、世界中で何千万人かが同時に同じ曲をカラオケで歌うような機会などもあって良い。

【橋爪委員】

たとえば宇宙空間での居住など、人類の生活空間の拡張に関連する事業や展示も想定されるべき。報じられているように、2025年には「火星移住」の計画が具体化している可能性もある。

【橋爪委員】

テーマと響きあい、世界の人々が注目する象徴的なシンボルが必要。ロンドン博の水晶宮、パリ博のエッフェル塔、シカゴ博のフェリス・ホイール、モンリオール博のアピタ67、70年大阪万博のお祭り広場と「太陽の塔」、上海博の中国館などと、比肩し得るアイコンックな景観を用意したい。

【福井委員】

今必要なのは、会場となる夢洲がいかに魅力的なロケーションであるかを示すことである。夢洲は埋め立て地だが、決して不利な材料とはならない。これからの自由な発想で構想できる素晴らしい空間である。

【福井委員】

「島」なので、万博の条件となる保税地区として簡単に囲い込めるし、島全体をスーパー特区にして世界に開放し、観光だけでなく外資の投資対象にもなるような仕掛けを作ればいい。国連機関のランチやアメリカのFDA（食品医薬品局）などの認証機関を呼び込めば、夢洲は世界から注目される出島となる。パビリオンやイベント企画は今後詰めていくが、跡地利用を含めた事業展開の考え方を今示すことが、誘致成功への大きなファクターになる。

【福井委員】

誘致の顔として経団連の榊原会長が決まったが、他にも「誘致大使」として数人の著名人、文化人をお願いすることにすればどうか。（たとえば、カルロス・ゴーン氏）

【増田委員】

「健康になれる」博覧会
博覧会場全体が「健康になれる街」の見本となることを目指したい。歩道以外にも、自転車道やランニングコースを外周に設置し、パビリオンに入らなくても歩いたり、走ったりして楽しめるように。また、来場者が気軽に「ゆるスポーツ」や「ダンス」などを体験できる広場があると、運動と同時に交流も図れるだろう。

4. 事業展開

【増田委員】

「途上国の参加」

最先端技術はコストが高く、途上国にとっては手の届かないものが多い。途上国が世界に健康で貢献できることにスポットを当てたい。例えばハーブやアロマの原料、ナッツやカカオなどの健康食品など。小さなブースでの出展を可能にし、地元料理や食品などの販売で収益を上げられるようにして、参加国が増えるようにしたい。

【森下委員】

日本発先進医療を世界へ発信するモデルルーム病院となるようなパビリオンを作り、万博後は再生医療センターとして活用する（日本の最先端医療のショールームとなるモデル病院のようなパビリオンを作り、日本型医療の輸出を促進する）。ここで行われる医療の現場を、VRで同時に世界中で見学・体験を可能にする。

【森下委員】

ウェアラブルデバイスを用いて来場者の健康データの取得を行い、毎日万博発健康情報を発信する。

【森下委員】

最先端の医療や遺伝子診断技術による世界のVIPの健康診断を行う。

【森下委員】

近未来の介護やリハビリ技術の発信の場として、ロボット技術、ICT活用による日本型介護のショールームを作り、体験してもらう。

【森下委員】

超高齢化社会におけるsustainabilityを実証するために、全自動運転車、アンチエイジングハウス、住むだけで元気になるスマートシティを作る。

【森下委員】

健康を保つスポーツの世界同時体験を行う。万博会場あるいは周辺で毎週末ギネスに挑戦シリーズと題するようなイベントを行う。例えば、3万人でラジオ体操、3万人でヨガ、舞洲庁舎を歩いて上る1万人運動、淡路大橋を3万人で横断などが考えられるが、これらのイベントをVRやICTを活用して、日本や世界で参加者を募る。

【森下委員】

食による健康長寿として、ユネスコ登録無形文化遺産の和食を広げ、農作物の海外輸出につなげる試みを行う。期間中万博あるいは周辺の舞洲会場などで食の祭典を開催し、全国各地の農作物や機能性表示食品の展示販売を行う。また、サテライト会場として京都での和食体験、淡路・神戸・南河内などで農業体験とテーマパーク、和歌山・淡路島で漁業体験とテーマパーク（黒潮市場、近大マグロ養殖など）など、近畿一円で万博と連動して開催する。

【森下委員】

淡路島の農業・漁業、和歌山県の農業・漁業を追加すべきである。淡路と夢洲、和歌山港・関空・夢洲間などで、自動運転観光船の実証実験をする。

【森下委員】

USJなどとの共通入場チケットで来場者を誘引するとともに、それぞれの施設の混雑状況のリアルタイムで発信し、混雑緩和を図る。

【森下委員】

夢洲乗り入れは、すべて全自動シャトルバスに限定して、AIで交通管理を行う。

4. 事業展開

【森下委員】

面積に関して、埋め立てを必要としないラグーン（人工環礁）を万博会場として設定し、養殖マグロなどの機能性水産物の展示（巨大釣り堀）と万博食堂などで提供、揚力発電や海上ソーラー発電施設の活用によるsustainabilityの展示場として活用する。

ラグーンの埠頭の利用により、水上バスの活用が可能になるほか、会場地の拡大になり、混雑緩和につながる。跡地は、クルーズ観光に利用し、IRに転用する。

【森下委員】

ドローンを全て万博事務局に登録し、ドローンの活用による飲食の提供やグッズ販売などを行い、施設部分の不足を補う。ドローンなどの実証実験を行うための特区にする。

【森下委員】

エントランスエリアは、舞洲・南港側の入り口に設け、分散入場を可能にする。